

## 特別寄稿 LGBTの友人夫婦と参加した「ウィメンズ・マーチ」から見えた「民主主義の破壊者」へのプロテスト | ケイン岩谷ゆかり

Text and Photograph by Yukari Iwatani Kane

ケイン岩谷ゆかり 1974年、東京生まれ。米ジョージタウン大学外交学部卒業。1996年にロイターに入り、2006年～11年、ウォールストリート・ジャーナル記者。15年からカリフォルニア大学バークレー校ジャーナリズム大学院講師。著書に『沈みゆく帝国 スティーブ・ジョブズ亡きあと、アップルは偉大な企業でいられるのか』

Translated by Courier Japon



ウォール・ストリート・ジャーナル記者として、アップル社をはじめとしたテック記事で数々のスクープを出してきたジャーナリスト、ケイン岩谷ゆかりは、いま米国のジャーナリズムの殿堂の1つ、UCバークレー・ジャーナリズム大学院で教鞭をとっている。

著者は、これまでジャーナリストとして、何かに表立って「プロテスト」することなど一度もなかった。しかし、今回ばかりは、違った。西海岸からの特別寄稿。

### 就任翌日のパレード

トランプ大統領の就任の翌日のことだ。サンフランシスコでこれまで見たことのないほどたくさんの人々と、私は隣り合わせで立っていた。雨が降っていたが傘をさす余裕もない。彼らは、「私の大統領じゃない」「トランプが嫌いなものを好き」「私たちは抵抗する」といったプラカードを手にしてた。

ケーブルカーの鐘が鳴ると、パレードが始まった。この行進のすぐ後ろには、たくさんの女性が「ウィメンズ・マーチ・サンフランシスコ」と書かれたパレード幕を掲げている。

私もパレードの群れの中に入り、世代も民族も入りまじった数万人の女性、男性、子供たちとともに歩きはじめた。老いも若きも、黒人、白人、アジア人、イスラム教徒、ヒスパニック……。車いすにのった障害者もいる。

私の隣では、キャリーとアンドリアが手を繋いでいた。アンドリアが妻の頬にやさしくキスをすると、キャリーはアンドリアの口元へしっかりとキスを返した。



キャリーとアンドリア

## 私の職業と出自

サンフランシスコは、よく「生きた砦」と呼ばれる。「サンフランシスコの住人は、何かにつけ、すぐプロテストをする」というのは、街中で交わされる冗談の1つだ。

しかし私は、8年間この街に住んでいるけれど、プロテストに加わろうという気になったことはなかった。実際、これまでの人生で、何かに対して抗議することなど、一度もなかったのだ。

その理由の1つは、私の職業にある。

私はジャーナリストだ。ジャーナリストは、中立の立場にあるべきだとされている。

さらに、文化的な理由もある。私は人生の半分以上を米国で過ごしてきたが、子供のとき、日本と米国のあいだを3回行き来した。日本人である両親は、礼儀正しく、控えめで、そして人と対立しないようにと、日本の価値観とともに私を育てた。日本の学校でも、目立たず、周囲に従うようにと教えられた。プロテストというものが教えられる余地など、どこにもなかったのだ。

最後の理由は、自分でも認めたくないと思ってきたことだが、自分がずっとある種の特権階級のなかで生きてきたということだ。

アジア人というのは、米国では比較的受け入れられている人種だった。私の父は世界有数の日本の電気メーカーに勤務していた。父が米国勤務を指示されたことで、私たち家族は米国に引っ越してきた。トップクラスの学校がいくつもある素敵な街の、感じのいい住宅地で私は生活することになった。

米国人と結婚し数年前に市民権を得るまで、私は自分のことを移民でなく、国外駐在者と思っていたのだ。私にとって、日本は米国と同じように、故郷と呼べる国だったし、いまもそうだ。これはまた、ほとんどの人が持つことのできない「切り札」を私が持っているということも意味した。私には、他に行くところがあったからだ。



### 「受け入れの国」を信じていた

しかしここ数ヵ月、私の世界が真逆さまにひっくり返されたかのように感じている。いままでこの国で、私は「受け入れられている」と思ってきた。私が女性であっても、仕事の質のほうが重視される能力主義の環境で働くことは楽しかった。

人種差別が存在することに無自覚なわけではなかったが、この国は、少なくとも世界の他の多くの国と比べれば、基本的に「受け入れの国」であると信じていた。

しかしいま、私たちが迎え入れようとしているのは、社会として作り上げてきた進歩を破壊することに精を出しているように見える大統領だ。彼はイスラム教徒、メキシコ人、女性、ジャーナリスト、環境、さらには「事実と真実」という概念さえも標的にしている。

彼の攻撃リストは毎日増えていた。中絶を違法にし、オバマケアを廃止し、メキシコとの国境に壁をつくり、イスラム教徒登録制をはじめるといった脅しは、私の同僚、友人、教え子も直撃しつつあった。

彼が脅かしているのは民主主義だけではなく、人間の基本的権利でもある。どう参加しないでいられようか？ 人生において初めて、自分が信じるもののために立ち上がらねばという、市民としての義務を感じたのだ。

### キャリーとアンドリアの結婚式

友人夫婦のキャリーとアンドリアから抗議デモに参加する予定だと聞いて、私も行くことに決めた。なぜかそれが正しく感じられたのだ。私にとって彼女たちは、これまでの社会の進歩を象徴するとともに、それを失うリスクを負う人たちでもあったからだ。

キャリー・ガトレン（43）とアンドリア・エベレット（46）は昨年9月に結婚したばかりだ。夫と私はキャリーを20年近く知っていたが、彼女が自分はゲイであると明かしたのは数年前のことだ。

それから間もなく、キャリーはアンドリアに出会った。彼女が40歳のときのことだ。アンドリアは過去に別の女性と結婚していたことがあり、キャリーも溺愛するコリンという名の息子がいる。

米国最高裁判所が同性結婚を合法にすることを宣言してから6ヵ月後、2015年のクリスマスイブに、キャリーはアンドリアにプロポーズした。およそ1年前に初デートをしたワインバーでのことだ。

サンフランシスコのシティホールでの結婚式で、誓いを読み上げ指輪を交換する2人の姿を見ながら、私は涙をこらえた。10歳のコリンがひざまずき、結婚指輪を差し出す姿に、みんなが微笑んだ。あれほど幸せそうなキャリーは見たことがなかった。



結婚式での2人

私は受け入れの社会に育ったわけではなく、同性愛者の権利をいつも気にかけているというタイプでもなかった。だが2人を見ていると、結婚は男女間のものだけのものだという考えが、どれほどばかげたことかがよくわかった。彼女たちは、2人でひとつだった。

結婚披露宴は、バイエリアをクルーズするボート上で行われた。挙式パーティーには、キャリーの父親、ランディーが参加していた。ランディーは66歳の同性愛者だ。

スピーチの出番がきたとき、彼のパートナーのジェフは、多くの友達がこんなにもあからさまに喜びに満ちている光景に、彼自身どれだけ圧倒されているかを話した。ランディーとジェフは25年間一緒に生きてきたが、彼らの時代は、いまほど同性愛が社会で受け入れられていなかった。

ランディーは、自分がゲイだと自覚したのは高校生ごろだったらしいが、それでも、社会の同調圧力のもと、結婚して2人の子供を持った。自分がゲイだと家族に告白したのは、キャリーが高校に入ってからのもので、それから奥さんと別れる勇気を持った。

息子のコリンは、アドリブのスピーチのなかで、キャリーを家族として迎え入れ、もうひとりの母親をもつことができる喜びを表した。

### 何が起こるかまったくわからない

「ウィメンズ・マーチ」では、私たちはほとんど会話はしなかった。たまに周りの人たちが持っているプラカードについてコメントするぐらいだった。ファーストレディーについて書かれていたプラカードには、み

んなが笑った。

「メラニア、もし救ってほしいのなら、2回またたきをして」

ピンク色をした猫の帽子をかぶったアジア人のある女性は、「50年代には戻らない」と書かれたプラカードを手にしていた。行進の外側でも、道の端に立った人々が、それぞれ手にプラカードをもって声援を送っていた。

ずっと後ろを見ると、シティホールがピンク色の光に埋もれているのが見えた。これらの光景に言葉を失った。これが、私が信じていたアメリカである。



調査によれば、当日は10万人もの方がサンフランシスコでの行進に参加していたことを後で知った。世界各地でおこなわれたパレードの総参加者は200～300万人に達したらしい。

キャリーが何らかの抗議デモに参加するのは、これがはじめてのことだった。アンドリアにとっては2回目のことだ。前回参加したのは1993年で、同性愛者の権利についての小さなデモだった。キャリーは、たったの2時間であっても、力強さと、他人との団結を感じたかったという。同性愛者の権利だけではなく、トランプが脅していたすべての人と、すべてのものがかかっていた。キャリーは言う。

「私たちが価値をおくシステム上のすべてのものが、民主主義にいたるまで、潜在的に攻撃されているようだわ。何が起こるかまったくわからない。不安は底知れない」

## ひとりひとりが変革を

カリフォルニアのような革新的な州において、キャリーとアンドリアが、結婚した夫婦としての権利を失うことはおそくない。しかし、彼女たちは国民としての権利について心配している。税を共同申告する権利を失うのか？ 社会保障遺族給付金を受給できるのか？ 状況が大きく悪化したときのカナダかオランダへ移住の可能性も話し合ったという。

いまのところ、どうプロテストを続けていくかに、彼女たちは関心を向けている。アンドリアはコリンのこともあるので、とりわけ決意が固い。アンドリアはこう語る。

「(トランプの) 口から、あんなにひどい戯言が次々とでてくる。どうしようもない、なんてひどい『ロールモデル』なんだろう。私が政治的にアクティブなのは、コリンに救いがあることを教えるためです」



キャリーとアンドリアは、これまで全米市民的自由連合 (ACLU) と、National Center for Lesbian Rights (レズビアンの人権のための非営利団体) に寄付をしてきた。また2人は、政府と効果的に交渉する方法を学ぶため、4月にACLUのワークショップに参加する計画を立てている。アンドリアは、マイノリティや不法移民が多くを占める、恵まれない環境にいる高校生たちのメンターとして、ボランティアをする予定だ。アンドリアは言う。

「ひとりひとりのレベルで変化をもたらす機会を探しています。地域レベルで、自分たちの信念のための戦いを理解しなければならないんです」

アンドリアの言葉は感動的なものだ。物書きの1人として、私は政治的にアクティブすぎるということに関しては、いまだ不安を感じる。しかし、私たちが知っていた世界とは別の世界で生きているということも、充分すぎるほど明白になってきたのも事実だ。

アンドリアのおかげで私が考えたいと思うようになったのは、将来をいかにして変えることができるか、またいかにして変えるべきか、ということなのだ。

## ケイン岩谷ゆかり

### *Yukari Iwatani Kane*

ジャーナリスト。1974年、東京生まれ。ジョージタウン大学外交学部（School of Foreign Service）卒業。父の仕事の関係で3歳の時に渡米、シカゴ、ニュージャージー州で子供時代を過ごす。10歳で東京に戻ったものの、15歳で再び家族とメリーランド州へ。大学3年の時に1年間上智大学へ逆留学したが、その後アメリカへ再び戻る。アメリカのニュースマガジン、U.S. News and World Reportを経て、ロイターのワシントン支局、サンフランシスコ支局、シカゴ支局で勤務後、2003年末に特派員として東京支局に配属。通信業界、ゲーム業界などを担当。2006年にウォール・ストリート・ジャーナルへ転職。東京特派員としてテクノロジー業界を担当。2008年にサンフランシスコに配属、アップル社担当として活躍。スティーブ・ジョブズの肝臓移植など数々のスクープを出したのち、書籍『沈みゆく帝国 スティーブ・ジョブズと、アップルは偉大な企業でいられるのか』執筆のため退職。現在はカリフォルニア州立大学バークレー校のGraduate School of Journalismで講師をしながら、次作を執筆中  
公式サイト [www.yukarikane.com](http://www.yukarikane.com)

---

COURRIER